3　須藤製糸幸手工場の思い出　～糸を繰る女工さんからの聞き取り調査から～

（1）波木井彰子さんに聞いた戦後の幸手工場

繰糸機と波木井さん（昭和30年）

太平洋戦争後、復活した須藤製糸株式会社幸手工場の第１期工員として働いた波木井さんに、当時の工場のことを教えていただきましたので、その一部をご紹介します。

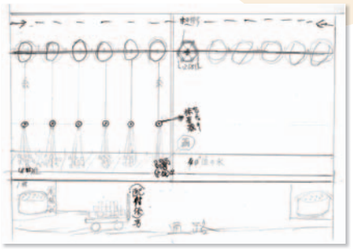
太平洋戦争中、空襲を避け東京から山形に疎開（そかい）していた波木井さんは、２年間の辛い疎開生活を送りました。終戦後、東京に戻りましたが、空襲で家を失ったため、友だちを頼って一時久喜に住みました。そこで、見つけた働き口が、そのころ復元工事が始まっていた、須藤製糸の幸手工場だったそうです。

女工さんたち　女工さんは、東北から住み込みで働いていました。福島・宮城あたりからの人がいましたが、12～13歳くらいの人たちでした。幸手の町場の人もいましたが、吉田村や権現堂川村の人もいました。女工さんは、丈夫で働き者、そして腕も良かったので、「須藤製糸で勤まった人は、どこに行っても勤まる」といわれていました。

女工さんたちの勤務体制・勤務時間　初めのころ、勤務時間は午前８時～午後５時まででしたが、その後、忙しくなってきたため二交代制になりました。早番は朝５時から午後１時まで、遅番は午後１時から午後９時という勤務時間でした。

波木井さんの仕事ぶり　糸をとるには、まず箒（ほうき）みたいなもので繰糸鍋の湯に浮かんでいる繭から目を出して、からげていきます。そして、切れた糸に、また糸を接（つ）いでいきます。一人の女工さんが担当する機械の数は普通２台で、繰糸鍋が20個ですが、二人分の40個を一人で担当していました。腕は良かったので、学校などから見学者が来るときなど、一番端の機械の前で糸をつんでいるところを見てもらう役割が回ってきました。また、工場では、毎日成績が貼り出されます。仕事の評価は、繰った糸の出来具合だけでなく、繭の使い方、それに煮た繭を入れた桶を空けた数で評価されました。１級から10級までありましたが、いつも上位２番から５番までには入っていました。

（2）田中そめさんに聞いた戦後の幸手工場



田中そめさんは10代後半、太平洋戦争終戦後間もない頃に、須藤製糸株式会社幸手工場の女工さんとして約１年間勤めていました。

右掲の図は、聞き取り調査の際、そめさんから提供された当時の繰糸工場内部の様子を描いた図です。

一人の女工さんは、約1.8メートル幅の繰糸機を受けもちました。繰糸鍋には約40℃の湯が張られ、その中に約８粒の繭を入れ糸を繰り出していきます。さらに、接緒器で１本によられた糸は上部の木枠に巻き取られ、いっぱいになると隣にあった再繰部の人が持っていき揚げ返しの作業が行われます。

女工さんたちは、持ち場の鍋の繭が無くなりそうになると、新しい繭を補充する作業を繰り返します。その繭は、釜屋で大量に煮られたもので、風呂の手桶のような木桶に入れて配付係り（男性）が配車で運んでくるそうです。

残業はなく、月２回くらい日曜日には休め、午前と午後の休憩とお昼休みもある工場勤めは、子守りや女中奉公に比べ、良い仕事だったそうです。

須藤製糸 幸手工場の資料を探しています

郷土資料室では、幸手と生糸の歴史を解明するため、引き続き幸手工場について調べていきたいと思います。当時の工場の写真や関係資料があれば、お知らせください。その他、幸手の生糸の生産に関する資料があれば、ご一報ください。

幸手市文化遺産だより　第15号
平成30年３月１日発行
編　集：幸手市教育委員会 社会教育課
（郷土資料室開設準備担当）
〒340-0125 幸手市下宇和田58－４
TEL 0480－47－2521
発　行：幸手市教育委員会

幸手市文化遺産だより

VOL.15

● 蚕・繭・生糸　―「絹」が物語る幸手の産業遺産 ―

繭をめぐる 幸手の歴史

明治時代から大正、昭和時代にかけて幸手は繭（まゆ）や生糸（きいと）の生産が盛んに行われました。

今回の文化遺産だよりでは、養蚕業や製糸業など、絹にかかわる幸手の産業の歴史をご紹介します。

●蚕・繭・生糸　―「絹」が物語る幸手の産業遺産 ―

1　幸手の養蚕業・製糸業の歴史

江戸時代

幕末

江戸幕府が外国と通商条約を結び、安政６年（1859）に貿易を開始してから、生糸と蚕種紙は日本の主要輸出品となりました。

「幸手白」という白木綿の産地であった幸手では、木綿織物業が盛んで、養蚕業・製糸業は未発達でした。

蚕種紙の輸出と幸手

慶応元～２年（1865～66）、アメリカ人と江戸呉服町の与兵衛との間で発生した蚕種紙取引きのトラブルに、買入れの仲介をした上吉羽村の利右衛門らが関係人として現れ、幸手の人が外国貿易と関係したことがわかります（金子家文書）。

明治時代

初期～10年代

埼玉県は、明治５年（1872）11月の勧業掛の設置を契機に、桑の植栽を奨励する巡回指導を実施し、養蚕業を奨励します。

幸手市域でも繭の生産が始まりますが、まだわずかなものでした。

製糸館建設の猶予願い

埼玉県は、明治５年（1872）に開業した官営富岡製糸場（群馬県富岡市）を手本に製糸館の建設を各市町に勧めますが、幸手宿、惣新田、木立、平須賀の各村などは、製糸館建設を猶予するよう明治６年10月に嘆願しています。桑の植栽が春から始まったばかりで、養蚕を行う者も少ないことがその理由でした（岸本家文書）。

20～40年代

明治22年（1889）５月に北葛飾郡・中葛飾郡地域の蚕糸業者は、埼玉県葛飾蚕糸組合を設立し、幸手町大字幸手に組合事務所を置きます。さらに、同25年（1892）11月に埼玉県東振社が設立し、事務所が行幸村大字外国府間に置かれました。

幸手にも養蚕業、製糸業が広まり、地域の主要産業として発展していきます。

東振社社員証と同社が製造した蚕種紙

埼玉県東振社

養蚕法を改良し、完全な蚕種を製造するため「蚕業伝習所」を設置します。蚕種種類の試験と桑樹選択、栽培試験を実施し、販路と業務の拡大を目指すなど養蚕篤志家の養成を行っています。

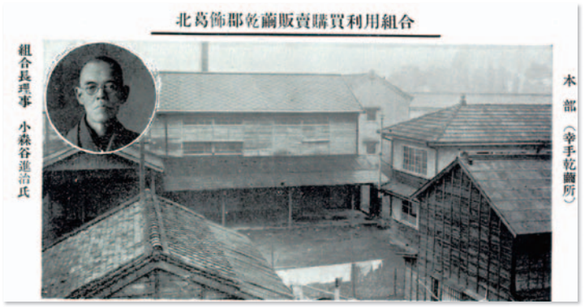
大正時代～昭和時代

～戦前

茨城県古河の合名会社須藤製糸所は、大正12年（1923）５月に幸手に分工場を設立します（現在の幸手北モール）。

また、大正15年（1926）５月には、「有限責任北葛飾郡繭販売利用組合」が創立し、乾繭所を建設します。

昭和２年（1927）の金融恐慌と同４年の世界恐慌で、蚕糸業界は不況になりますが、製糸工場と乾繭所がある幸手は、繭と糸のまちとして確固たる地域を築きます。



幸手乾繭所

当初は少なかった乾繭委託数も実績を積み、乾繭事業に対する需要が年々増加し、昭和７年（1932）時点では、幸手乾繭所の繭が大宮丸山製糸に選ばれるまでその品質を向上させていきました（写真は『埼玉県乾繭組合史』より）。

2　幸手にあった製糸工場　―須藤製糸幸手工場―

昭和20年代半ば頃　須藤製糸株式会社幸手工場の従業員　（波木井彰子氏寄贈）

須藤製糸所は、明治時代前期から製糸業が盛んで「糸の町」ともいわれた茨城県古河で明治20年（1887）５月に創業し、以来、昭和期には古河を代表する製糸業者となります。

明治43年（1910）１月には、合名会社須藤製糸所を設立し、大正12年（1923）５月に幸手に分工場を設立します。

昭和初期には、１町歩（約9,900㎡）の敷地に500坪の工場と寄宿舎、講堂などを完備し、釜数は92台、職工数は120人でした。生糸生産額は年間20万円に達し、幸手の製糸業界をリードしていきます。

しかし、太平洋戦争が始まる昭和16年（1941）12月には、軍事工場に譲渡し、須藤製糸所は幸手を離れますが、翌17年11月に須藤製糸株式会社を設立しています。

終戦後、昭和21年（1946）３月に、同社取締役社長の須藤英一郎は、幸手工場での製糸業免許申請を改めて行っています。

工場は、幸手町大字幸手に位置し、製糸工場をはじめ乾繭所、寄宿舎等の建物合計坪数は703.7坪という計画です。さらに、工場には、繰糸機120台（増沢式多条）、煮繭機１台（増沢式複式）、揚返器窓数220窓、汽罐１基（ランカッシャー）の設備を配し、これらを５台の電動機と３台の蒸気機関で駆動させる計画でした。また、１年間の原料繭の消費見込み数は、春蚕繭35,000貫、夏蚕・秋蚕繭25,000貫の合計60,000貫とし、１年間の生糸の製造を8,450貫と見込み、3,885,000円の事業収入の計画を立てています。

その後、不運にも昭和22年のカスリーン台風の大洪水で被災しますが、復元した工場は順調に発展し、昭和20年代後半には、敷地6,304坪、建坪1,051坪になっています。また、寄宿舎も完備されたため、女工員は宮城県仙台周辺からも集まっていました。総数260名の従業員たちにより年間665俵の生糸が生産され、主にアメリカ、フランス、イギリス、東南アジア諸国に盛んに輸出されていました。

しかし、昭和32年（1957）に閉鎖され、須野繊維工業株式会社が新たに設立されました。